

第Ⅱ部

災害が壊す社会、生み出す絆

# 創造的復興とアジア市民社会の形成

——フィリピン・ピナトウボ山噴火で被災したアエタ支援の経験から

清水 展

はじめに——東日本大震災の衝撃を受けて

二〇一一年三月一日の大震災の後、私自身の歴史意識や時間感覚、そして空間認識や自然観が変わった。普段はまったく意識しないほど遠く離れた海の深い場所での地殻変動が、人間の暮らしを壊滅させる力を秘めていること。その力の発現が、数十年から数百年という長期の周期で繰り返されること。過去から現在、そして未来へと一方向に流れて、進歩や発展をもたらす時間ではなく、繰り返される時間と歴史の重みが、突然、目の前に現れ出た。近い将来、一〇年か二〇年の先に関東から東海、四国にかけての沖合でも、同じような巨大地震が発生するかもしれない。

その前に直下型の地震が東京を襲うかもしれない。あるいは富士山が噴火するかもしれない。自然災害の猛威を前にして、社会インフラの脆弱さと人間の生命のはかなさ、さらには人間の存在自体の弱さと卑小さを痛感させられた。

しかし、そうした弱さや脆さを痛感し悲観的になる一方で、なおかつ壊滅的な打撃から復興へと立ち上がってゆく人間の強さと社会の強靭さを確信している。そう信じる理由は、一九九〇年代を通じて、私自身が災害救援と復興支援に深くかかわった、フィリピンの先住民ピナトウボ・アエタの事例がそれを証明しているからである（詳細についてはShimizu 2001と清水二〇〇三・二〇一二なども参照）。

わざわざフィリピンの事例を手掛かりとしなくとも、日本においては、アジア太平洋戦争の末期にアメリカ空軍の無差別爆撃と焼夷弾攻撃によって東京が焼け野原となった

とき（一九四五年三月一〇日、死者一〇万五〇〇〇余人）、それより前に関東大震災で東京が壊滅状態となったとき（一九二三年九月一日、死者八万三七〇〇人）、いずれも被災者たちはほとんどゼロ状態からの復興を成し遂げていった。東京大空襲以外にも、広島と長崎の原爆、沖縄の砲撃と野戦による民間人Ⅱ非戦闘員の大量殺戮と生活インフラの徹底的な破壊の場合でも、被災者たちは屈服させられることを拒み、自暴自棄に陥らず、辛うじて残された物的資材と人的ネットワークを総動員して復興に取り組んだ。

そうした事例を念頭に置きつつ、ピナトウボ・アエタに着目してここで詳しく報告する理由は、一つには、被災からの過程が創造的であったからである。すなわち彼らは、単に被災前の生活や状態を取り戻すという復旧や回復ではなく、新しい土地で、新しい人間となり、新しい社会をつくっていった。すなわち、言葉の真の意味で創造的復興を成し遂げていったからである。

アエタに着目すべきもう一つの理由は、その創造的復興の過程を、フィリピン政府（中央と地方）だけではなく、国内のさまざまなNGOが、海外のNGOや国際機関と連携協働して支えたことである。フィリピン国内だけでなく、海を越え国境を越えた支援のネットワークが、アエタの生活と社会の創造的復興を可能にした。あえて極論すれば、噴火の一撃によって、旧来の生活世界が崩壊したり社

会システムが機能不全に陥ったりした後に、草の根レベルで国際的な救援・支援活動が活発に行われ、そのなかで国際公共性あるいはアジア市民社会の建設につながるような萌芽、あるいは端緒が生まれたのである。すなわち、アエタ被災者・社会の創造的復興のために、いまだ漠然と市民社会という仮称でしか呼びぶような無数無名の人々が積極的に関与し、逆にその過程のなかから、市民社会なるものの創出や連携につながるような新たな意識の変化と行動が生まれてきたのである。

被災からの復興過程の特徴について、先に言及した三つの災害を比較すれば、関東大震災からの復興は、政府の強力な指導による近代的な帝都建設の企てとして、上から推進され、時には強要されたプロジェクトであった。一方、敗戦後の復興は、上からの指導や介入とともに、焼け跡開拓市という、ある意味でアナーキーな自由空間において、被災者個々人の努力と才覚による下からの生活再建の企てが重要であった。それに対して、アエタの復興は、海を越えたネットワーク、いわば横からの伴走支援に支えられた、自助自立Ⅱ自律への取り組みであった。アエタの事例は、ある意味で、同時代的には極端で例外的と言えたかもしれないが、二〇年を経た今から振り返ると、時代を先取りした試みであった。

そもそも創造的復興とは、阪神・淡路大震災後に復興に

携わった関係者らが掲げた理念であった。その際の復興理念の枠組みは、大震災をシュンペーターの言う「創造的破壊」に等しいものと位置づけ、二一世紀に通用する復興を目指すものであった(阪神・淡路大震災記念協会 二〇〇五)。今回の創造的復興の内容について、復興構想会議の議長を務めた五百旗頭は、「東北地方ができることなら、フロントランナーに浮上し、日本経済全体を引っ張ってくれるような前向きな復興をやるべきだというのが基本的な考えだ」と明言している。バブルがはじけて以降の失われた二〇年からの回復・日本再生のためのきっかけとすることを強く意識している。被災地の復興とともに、それ以上に、自然災害を奇貨として日本経済の復活を図ろうとする姿勢が明確に見て取れる。

本稿で論ずる創造的復興は、それら政府主導の計画とは異なり、自然災害に対する被災者と被災社会の潜在力、あるいはリジリエンシー(柔軟対応力)と呼ばれるものに着目し、それが十全に発動するために国際NGOの支援活動が大きな役割を果たすこと、そうした活動をとおして国境を越えた草の根レベルの結びつきや結ばれ合いが生じること、それが互いに顔が見えたり相手を意識しあう関係に導びかれ支えられ海を越える国際公共性(とでも呼ぶうるものの萌芽)を生み出すことについて報告し、主張する。人間の存在と営為が自然の威力を前にして小さなものである

全体の平均気温を一度以上も下げた。爆発規模はその二週間前に起こった雲仙普賢岳の噴火の約六〇〇倍、二〇世紀で最大級であった。降り注いだ礫、砂、灰はピナトゥボ山腹や山麓の一带に厚く積もり、自然環境を激変させた。焼畑農耕と狩猟採集という伝統的な生業基盤を失った彼らは、周辺地域の平地民社会のなかで避難生活を送ることを余儀なくされた。

しかし、一時避難センターやテント村から政府が造成した九ヶ所の再定住地へと移り住み、新しい土地で新しい生活と新しい社会の建設を果たしてゆく苦闘のなかで、彼らは先住民としての自覚を強め、民族として新生していった。その過程では、海外からの一〇〇を超えるNGOが、半年から一年、二年、なかにはそれ以上の長期にわたり、さまざまな支援活動を行い、大きな力となった。アエタ自身の自助努力と、海外からの草の根に届く支援とが、アエタが新しい人間となり、新しい生活を始め、新しい社会をつくり、民族として新生してゆくことを強力に支え、後押ししていった。

私は、一九七七年から七九年までの二〇ヶ月、ピナトゥボ山南西麓のカキリガン村に住んでフィールドワークを行い、博士論文を書き、それを改訂してPinatubo Ayzas: Continuity and Change (1989)と『出来事の民族誌』(一九九〇)とを出版した。また、一九九一年三月末から一年

こと、しかしそれでもなおかつ、アエタ被災者たちが自然の猛威に屈服することなく生活を再建し、民族として新生していったことを素直に認めるならば、おそらくは現代世界でもっとも小さな存在であるフィリピンの山地焼畑耕作民が経験した、壊滅的な被災からの復興過程に学べることは少なくない。

## I ピナトゥボ山の大噴火(一九九一)とアエタの被災

フィリピンのネグリート系先住民である二万数千人のアエタが、西部ルソンのピナトゥボ山の山麓で移動焼畑農耕と狩猟採集を生業として暮らしていた。成人の男子で一五〇センチほどの低身長、暗褐色の肌、縮毛などの身体的特徴をもち、噴火前には、平地キリスト教との接触や交渉をなるべく避けていた。フィリピンでは、植民地の宗主国であったスペインやアメリカの影響により、今でも白人が力と美の理想を体現しているとされている。そのため地元の平地キリスト教民からは、学校教育もキリスト教の福音も知らない、遅れて劣った未開人として差別されてきた。

一九九一年六月に起こった大噴火は、噴煙を上空四〇キロメートルにまで吹き上げ、太陽光を遮ってその夏の地球

間のサパティカル休暇を得て、マニラで大衆文化と政治意識・政治運動の調査を行うチャンスを得たとき、たまたまの偶然だが、私の不惑の誕生日の当日に、ピナトゥボ火山の大爆発が起こった。そのことを私は、何か運命的な啓示のように勝手に思い込み、当初の研究計画を変更して、それ以降友人知人のアエタ被災者のために、救援と復興支援に深くかかわった。

そもそも博士論文のためのフィールドワークを終えた後も、夏休みや冬休みに長期の調査でフィリピンに来る機会があると、里帰りのような気分です、三日はカキリガン村の友人知人たちを訪ねていた。だから、噴火から一ヶ月ほど後に、被災したアエタの友人知人たちを一時避難センターやテント村に初めて訪ねたとき、彼らの救援や復興支援のために自分ができることは何でもやりたい、絶対にやらなければと思った\*。そこで、日本のNGOであるアジア人権基金が、ピナトゥボ被災者救援のためにフィリピンで設立したNGOのAVN(アジア・ボランティア・ネットワーク)のボランティアとなつて積極的に活動した。

大噴火が必至となったとき、その数日前からピナトゥボ山中で暮らすアエタに対して、ふもと町村の役場による避難誘導が積極的に行われていた。それに従って大半のアエタたちは山を下り、学校や教会などに収容された。最後まで山を下りることを拒んだ者たち一〇〇人ほどが、大噴火

の直前に山中の二ヶ所の洞窟に避難したが、そこを襲った火砕流によって焼死した。山を下りた者たちは、周辺の街や村の各所に設けられた一時避難所に一〜二週間ほど滞在し、七月になってから大規模テント村に収容された。テント村で数ヶ月を過ごして年が改まる頃、アエタ被災者は、政府が造成した九ヶ所の再定住地に移って新生活を始めることになった。高床式の小さな家のほか〇・二〜〇・三八クタールほどの農地が提供されたが、そこは石が多く荒れて乾燥しており、農業による自立はほとんど不可能であった。

## Ⅱ 生活再建の歩みと先住民としての新生

そのためアエタの新生活は、初めの半年ほどは米や缶詰などの食糧の配給に頼らざるをえなかった。しかし、それではアエタの依存を助長するだけであるとして、その後は、再定住地の道路その他のインフラ整備の工事で働いて米や現金をもらう、失業対策事業 (Food/Cash for Work) に切り替えられた。それも一年ほどで打ち切られてしまった。一方で国内・国外のNGOが、豚の飼育や、手編み籠、刺繍、手漉き紙、その他の手工芸品の製作販売などの生計プロジェクトを指導し支援したが、どれも成功しなかった。製品の出来が稚拙で、NGOの支援者らが優先的

で用いる言語などの面で、日常的に接するマジヨリテイである平地民の生活スタイルの受容が進んだ。子どもたちは学校教育をとおして、国語であるフィリピン語を学びフィリピン国民としての意識を育んだ。大人たちもまた、自分たちはフィリピン人であるからフィリピン政府が助けられることを理解した。以前、フィリピン人とは平地に住むキリスト教民(タガログ人やイロカノ人やサンバル人)を指し、髪が「直毛の人たち」とか「町の人たち」と同義であった。ピナトゥボ山麓に住む縮毛のアエタは、そうしたフィリピン人とは異なるとの自覚をもっていた。それが、再定住地で暮らすなかで平地民との日常的で頻繁な接触をとおして、とりわけ子どもたちは学校に通うことで、また大人たちは住民登録をして援助物資を受け、政府機関の役人との対応や地方選挙や国政選挙に参加することで(読み書きができないので、ボランティアに助けてもらい)、フィリピン人としての自覚を強めていった。

と同時に、政府や国内国外のNGOをはじめ、自分たちに手厚い支援をしてくれる者たちの庇護的な温情も、逆に露骨に差別する者たちの蔑視も、いずれもマジヨリテイのフィリピン人とは異なる自分たちの身体的・文化的特徴のゆえであることも理解していた。フィリピン人である意識と、アエタである意識とが、二つながら同時に強化されていった。それに伴い、噴火以前には習慣 (ngali) と呼ば

に買い上げてくれる以外に販路を開拓できなかったからである。そのため多くのアエタは、近隣の農家の農作業に雇われたり、建設工事現場の日雇い労働者となったりした。

しかし、それだけの収入では不十分なので、ときどきは元の集落のあった地区に戻って焼畑を開き、イモやバナナを植えるようになった。かつて噴火の前には、拠点となる集落と、毎年新たに開いて六、七年で循環させてゆく焼畑との距離は、数百メートルから一キロほどであった。それが、焼畑まで二〇キロほどの距離を再定住地から一日かけて歩いて行き、数日ほど滞在して集中的に伐採や除草などの畑仕事を行う、いわば遠距離通勤をする焼畑農耕民となった次第である。再定住地周辺での日雇い労働と焼畑農耕の比重の置き方は、家族ごとに異なった。再定住地でのストレスの多い生活を嫌い、一、二年を過ぎてピナトゥボ山麓の一部の植生が回復してきたころからは、そこを完全に引き払い、噴火前の元の集落の近くに帰り、伝統的な生活をする家族も出てきた。数年の間に、一、二割が山に戻ったと推定される。ただし、植生の回復がピナトゥボの全域ではなかったので、アエタたちの全員が山に戻って昔の生活を取り戻そうとしても不可能であった。

結果として、大多数のアエタは、再定住地にとどまり、まったく新たな環境のなかでの生活に適応していった。表面的には、アエタ個々人の服装や生活スタイル、家庭の外に買っていたものに対して、より包括的な概念として文化 (Kultur) が頻繁に用いられるようになった。そもそも文化は、NGOのスタッフがエンパワーメントのセミナーなどで用いる、新奇であいまいで漠然とした、ともすれば空虚な概念であった。しかし、先住民としての覚醒と主張のなかで、彼ら自身によっても文化という言葉が、繰り返し語られることによって、文化は実体化あるいは実在化し、日常的でかつ重要な語彙となっていた。

さらに、皆が等しく噴火の被災と生活世界の激変を経験し、生活再建のための苦闘を共有してきたという自覚が生まれた。また、復興のための各種支援や条件の良い土地の優先的な付与を要求するための連携をとおして、過去も現在も未来も同じ運命の下にある一つの仲間、あるいは運命共同体であることを強く意識するようになった。

噴火が起こる前には、ピナトゥボ山から分かれる尾根筋で分けられた谷間の山腹斜面に住み、谷筋が異なれば、異なるグループと考えていた。ピナトゥボ山の東のパンパンガ州側では、そのマジヨリテイの平地キリスト教民が話すカパンパンガ語の方言を使い、西のサンパレス州側では、そのマジヨリテイである平地キリスト教民が話すサンバル語の方言を使っていた。身体的には同じ特徴を有するが、言葉と内婚を通じて、それぞれが個別のグループとしての一体感をもっていた。

しかし、噴火の後には、そうした地域ごとの言語や方言、通婚圏の違いを越え、フィリピン諸島に最初に渡来した祖先に直接に連なる真正の先住民であり、かけがえのない文化と生活スタイルを堅持してきたとの意識を強くもつようになった。また、そうした文化と生活を子どもや孫たちが保持し、先住民アエタとして誇り高く生きてゆくために、農業によって暮らしてゆけるだけの土地がぜったいに必要だと政府に要求し続けた。条件の良い再定住地を要求する根拠として、身体的な特徴を共有するピナトゥポ・アエタとしての自覚を強め、一つの先住民民族として新生していったのである。

そうした覚醒と行動の背後には、エンパワーメントと称する各種のセミナーを通じて、アエタのリーダーたちを後押しし、物心両面の支援を続けた内外のNGOやNPOの活動があった。何人ものリーダーたちが、マニラで開催されるセミナーに参加したり、外国のNGOの支援者たちに報告したり交流したりするために海外旅行を経験した。

### Ⅲ 日本の小さなNPOの活動とともに

——ピナトゥポからイフガオへ

それらのなかでも、ほんの小さな日本のNPOの活動

二年または三年に任期を延長して活動した。日本の青年協力隊が、相手国の政府機関ではない民間団体に隊員を派遣するのは、それが初めての試みであった。ただし、噴火の一年ほど前の一九九〇年から、最初の隊員がカキリガン村に派遣されており、受入れ団体（アエタ開発協会、ADA Aeta Development Association）とともに、畜産の振興プロジェクトを指導していた<sup>3</sup>。

最初の隊員は任期の後半から、彼に続く四人は噴火被災の後から、生活再建のための支援活動を行った。それらは、農業や畜産の指導であったり、再定住地までのアクセス道路の建設・整備であったり、給水タンクの建設と水道の敷設であったり、果樹と建設材のための植林であったり、保健衛生であったりした。五人の隊員なかの一人である富田一也（農業隊員、一九九二～一九九四）は、任期が切れて日本に帰国した後、一九九五年に再び兵庫県篠山郡山南町にある小さなNPO（国際葛グリーン作戦山南、IKGS）によって、あらためて同NPOの現地スタッフとして派遣された。

というよりも正確には、ピナトゥポでの活動を十分にできなかった不全感と悔いを残した富田が、再びピナトゥポに戻ることを願い、山南町まで出かけて自身の雇用を働かかけたのである。具体的には、山南町の特産品である葛を使ってピナトゥポの火山灰地を緑化し、その後に葛で被覆

と、それへの私の関与について本節で紹介したい。私が一九七〇年代の末にフィールドワークをした南西麓カキリガン集落の人たちは、噴火後の半年ほどを避難センターやテナ村などの仮住まいで過ごした後、政府が造成した再定住地への移住を拒否し、元の集落から二〇キロほど南に離れたカナインヤン地区の国有林のなかに、自主的に再定住地を確保して新しい村を建設した。

その土地は、彼らが環境天然資源省へ陳情したり、そのすぐ近くにあるケソン市の中心部の公園（ケソン・メモリアル・サークル）で集会を開きメディアの取材を積極的に受けたりすることで、いわば関係者を応援団として巻き込んでゆく戦術によって、獲得が可能となった。逆に、その運動を支えたNGOや主張を認めた政府機関にとっては、カキリガンの自主復興の歩みが、望ましいシヨーケースとして宣伝に使えるというメリットがあった。さらには、噴火前にアメリカ平和部隊の隊員としてカキリガンに派遣されていた女性の人脈も役に立った。その女性は、噴火後にアエタの復興支援をするために再びフィリピンに戻ってきたが、彼女のハーバード大学時代の環境学コースの級友が、フィリピン政府環境天然資源省の次官補になっていた。さらには、カナインヤン再定住地での新しい村の建設と生活の再建のために、日本から海外青年協力隊員五人（畜産、農業、助産、看護、村落開発）が継続的に派遣され、

したところに果樹や建設材の苗を植えるという、植林プロジェクトの具体案を作成し、そのための資金獲得と現地監督とのセットで自らを売り込んだのである。

富田は、それ以来、夫人である江里子（青年協力隊の同期生で、モルジブに派遣された後ピナトゥポで合流）と、フィリピンで生まれた三人の子どもたちとともに、現在（二〇一四年末）までピナトゥポ山のあるサンバレス州・カステリホス町に事務所兼住居を置き、活動を続けている。活動の期間は二〇年近くに及ぶ<sup>4</sup>。

富田の当初の活動は、ピナトゥポ被災地での植林プロジェクトであったが、二〇〇〇年代に入ってから、北部ルソン・コルデイリエラ山地イフガオ州フンドゥアン郡ハバオ村（一九九五年にユネスコの世界遺産として登録）での植林と社会開発のプロジェクトに力点を移し、それを一〇年間ほど実施した。そのプロジェクトは、一九三六年にハバオ村で生まれ育ち、一〇代の後半にバギオ市に出て木彫り職人となり、さらに木彫りの仲買人として成功したレイナルド・ナウヤックが発案し、ハバオ村の親戚や友人知人を説得して手弁当で始めたものであった。

ナウヤックは、イフガオをはじめコルデイリエラ山地から移住してきた先住民が集住するバギオ市のアシン・ロード地区の区長を一九八二年から一九八七年まで三期務めた後、故郷のハバオ村に帰ってそのプロジェクトを始めたの

である。彼は、北部ルソンの山奥の辺鄙な村をグローバルな世界大の広がりの中に位置づけ、とりわけ日米両国と歴史的に深いつながりを持つことを強調して、日本から多額の開発援助のための助成金を獲得した。

ナウヤックの活動で興味深いのは、村人を説得したり、マニラの政府機関（環境天然資源省、貿易産業省）や日本の国際協力機構（JICA）や民間財団に支援を要請したりする際に、彼が植林計画を意味づけるために説明をする仕方と内容である。ハバオ村の背後に位置するナプラーン山の一角は、北部ルソン山地のなかでも、外部からのアクセスがもつとも困難な要害の地である。それゆえ、アジア太平洋戦争の末期に、比島方面軍総司令官の山下奉文将軍が率いる日本陸軍主力部隊（通称「尚武集団」）が、最終拠点の複郭陣地を築き、およそ六万人の将兵を擁して最後に立てこもった地域である。そのためイフガオの村人たちは、山中さらに奥深く避難して三ヶ月余りを暮らし、その間に多くの村人たちが飢えと病気で命を落とした。また、日本軍を攻撃するアメリカ軍の砲撃や空爆のために、棚田が破壊され、崩落した土砂で水路が埋まり、生活基盤に大きな打撃を受けて、戦後の復興に多大の苦難を強いられた。

イフガオの地での最終決戦を決意していた山下将軍が降伏を受け入れるに至ったのは、ナプラーン山の森の樹木が生み出す生気や霊気が、彼の猛々しい心を宥め癒し、穏や

ル予算など）に陳情し、小規模な開発援助予算を獲得した。

それと並行して、日本側からも援助資金の獲得も行った。まずは、私自身が彼の強い要請に応じて、「グローバル」のカウンターパートとなるNGOやNPOを探し、幸いに、ピナトゥボで活動していた富田の快諾を得ることができた。そして「グローバル」は、富田のNPOを通じて、日本の五つの官民の財団やJICAなどから多額の援助資金を獲得し、その総額は一〇年あまりの間に八〇〇〇万円を超えた。そのおかげで、いわば手弁当で始まった「グローバル」の植林運動と社会開発プロジェクトは、継続的に拡大発展していった。

たとえば、JICAが二〇〇二年度に「草の根技術協力事業」を始めた際には、草の根協力型の第一号案件として、また初年度採択の唯一の案件として、「グローバル」の植林運動が採択された。世界遺産の棚田を守り、村人の生活を向上させるための住民主導の植林運動を、兵庫丹波の山間の町の小さなNPOが支援するというプロジェクトは、JICAが掲げる草の根の国際協力のモデルとして、以後、各種の広報媒体でしばしば紹介された。

そのプロジェクトの事前調査のために、JICAから調査チームがハバオ村にやってきたときには、私が彼らと同行して、ハバオ村の現況と「グローバル」の実態について説明をした。終了時の評価調査の際には、私が四人のチー

かで平穏な気持ちにさせたからに違いない、とナウヤックは言う。実際に、山下将軍の降伏とともに、フィリピンでの戦争は終わり、それ以上の無用の死者を出さずにすんだ。それはまさに、戦後の平和がこのハバオ村を抱く地で生まれたことを意味している、と彼は力説する。彼の言葉を借りれば、「平和がこの地に降臨した」のである。そうした歴史を踏まえ、ナウヤックは植林運動を推進するために一九九八年に設立したNPOを、「イフガオ・グローバル森林都市運動」(Iugao Global Forest City Movement: IGFCM)と名付け、その設立趣意書のなかで、ハバオ村の暮らしがすでにグローバルな出来事や政治経済の潮流と深く結びついていることを強く主張した。そして、NPOの略称である「グローバル」という言葉が、村人の日常生活のなかで頻繁に用いられるようになった。

ナウヤックは、戦争によってイフガオの人々に災厄をもたらした日本やアメリカに対して、直接に被害の賠償をせよと要求したわけではなかった。彼が繰り返し私に語ったのは、そうした歴史を思い起こし、多少とも罪悪感を覚えるならば、イフガオの子どもたちの未来のために、より良い生活のために、自分たちがしている植林活動を手助けしてほしいということであった。私に限らず、似たような論法で、彼はフィリピン政府の官庁（環境天然資源省、大統領府先住民局、イフガオ・棚田委員会、下院議員ポーク・バレ

ムの団長となってレポートを作成した。次いで、それを継承発展させて草の根パートナー型案件を申請する際には、私自身が事前の実行可能性調査と、事後の終了時の評価調査のチームに団長として参加し、JICA職員の協力を得て長文の報告書を作成した。一九九〇年代の後半から、ナウヤックが主導し、彼の親戚、友人、知人らの無償の協力を得て、手弁当で始めた草の根の植林運動に、私自身が最初の頃から深く関与した。その経験をあらためて振り返ってみると、巡り合わせと成り行きに流されながら、思いのほか遠くまで来たものだという感がする（清水二〇〇七・二〇一三を参照）。

それは、ピナトゥボ山の噴火の直後に、被災したアエタの友人知人たちが直面する困難からの脱出や問題の克服のために苦勞し奮闘する姿に接し、ささやかなお手伝いをしたいと思ったことから始まった。今から振り返れば、行き先分からないまま「巻き込まれてゆく人類学」を暗中模索で試行することであった。イフガオでは、さらに一歩進めて、開発援助のために自らが積極的にかわり、植林と社会開発のプロジェクトの立案から始まり、実施の際の助言や提言、さらにはその成果の評価にまでかわってゆく「コミットメントの人類学」、あるいは応答する（または応答責任を果たす）人類学（anthropology of response-ability）にチャレンジしたのである。

## IV フィリピンから創造的復興を考える

ピナトゥボ大噴火に戻って、それがアエタの被災者たちに引き起こした変化、あるいは復興の過程と到達点を一言でまとめれば、彼らが実際に暮らす世界の広がりや認識が、空間的かつ時間的に飛躍的に拡大したことであった。空間的にはピナトゥボ山の一带と山麓に限られていた生活世界の果てのさらに向こうに、復興を支援してくれるマニラの政府や海外の外国政府・国際NGOがあり、それらとのつながりを強く意識するようになった。NGOに招かれて、頻繁にマニラへ、そして海外へと旅するリーダーたちも現れた。時間的には、先住民として遠い過去にさかのぼる歴史があることを意識するとともに、子どもたちの将来や民族の未来を思うようになった。すなわち噴火前とは異なり、遠い過去と未来とにつながって位置づけられ、意味づけられている「今」という現在感覚を持つようになった。逆に言えば、「今、現在」を起点として、過去と未来の双方向に長く延伸された歴史意識や時間感覚を持つようになった。

イフガオの場合でも、ピナトゥボとまったく同様のことが生じた。すなわち、過去二〇年から三〇年ほどの間に、の止むを得ぬ選択であった。しかし他方で、噴火前からのアエタ社会の特徴は、きわめて高い流動性にあり、安全な他所への移住による災害対応は、災害文化としてアエタ社会に内包された危機対応システムとすることができると言える。

そもそも移動焼畑農耕をする人々は、伐採する畑を一定のサイクルで循環させるとともに、拠点となる住居や集落も頻繁に移動させている。たとえば、北部ルソン・コルディエラ山脈のイロンゴットが集落を移動させる最大の理由は、首狩りの応酬に対する安全確保のための逃避であった (Rosaldo 1980)。またスコットは、東南アジア大陸部のミャンマーからタイ、ラオス、カンボジア、中国南部にかけて、三〇〇メートル以上のゾミアと呼ばれる山地に住む一億人の高地民は、平野部の国家が課する賦役や貢納を逃れるために、移動焼畑という生業と双系という親族関係を選択、維持し、丘陵部から山地に散在して移動を繰り返してきたと主張する (Scott 2009)。山本 (二〇一一) や牧 (二〇一一) もまた、スマトラや日本においては、個人の移動力の高さや社会の流動性が、災害に対するレジリエンスを高めることを指摘している。それに対して、東日本大震災に対する政府の対応は、そうした移動によるレジリエンスを十分に念頭に置いていなかった。

しかし、復旧には元の状態の回復という明確な目標があることに比べて、復興は、まして創造的な復興には明確な

ハパオ村から海外出稼ぎに出た／出ている村人の総数は一六〇人を超え、三七〇世帯一七〇〇人ほどの村の総人口の一割弱に達する。その四分の三近くは女性である。出稼ぎを生み出したのは、フィリピンで、もともと陸路のアクセスが困難な山奥にも、グローバル化の波が達するようになったからである。村人は、経済、文化、その他の側面におけるグローバル化の浸透という圧倒的な力に対峙しつつ、抵抗したり便乗したりしながら、生活を守ったり、向上のチャンスを積極的に活かすようになっていく (清水二〇一三・二九三―三四一)。アエタの場合は大噴火であり、イフガオの場合はグローバル化であり、ともに想定外の外力によって変化を強要されたことを逆手にとり、より良い明日をめざして自身の生活と社会の再編を企てたのである。

グローバル化によるハパオ村の生活と社会の急変と比べて、ピナトゥボ・アエタの復興で特徴的なことは、生活の再建と社会の復興あるいは新生が、もともと住んでいたピナトゥボ山麓の故郷ではなく、そこから二〇キロ以上離れた再定住地で新しくゼロから行われたことである。新しい土地での新しい社会の建設、そして新しい人間と民族の新生こそが、被災したアエタたちの創造的復興であった。それは噴火の灰砂が厚く積もり、大雨のたびにラハール (土石流氾濫) を繰り返す、ピナトゥボ山麓に戻る選択肢がないため

目標を設定しがたい。あえて設定すると、経済主導の新たな開発主義となりかねない。そこでは人間と生活の論理よりも経済の論理が優勢されやすくなる。それに対してアエタの事例で見えてきたように、被災した当事者の主体性と柔軟性に着目し重視した創造的復興とは、新しい土地で、新しい社会と新しい人間をつくってゆくことにあった。

### おわりに——国境を超える草の根の市民連携へ

以上に紹介したピナトゥボ山噴火で被災したアエタの事例に即して、創造的復興をまとめると、それは、再定住地という新しい土地、新しい生活環境のなかで、自らが新しい人間となり、新しい社会をつくってゆくことであった。具体的には、たとえば生業に関しては、移動焼畑農耕と狩猟採集によるほぼ自給自足の生活から、それらを生存の最低限の基盤として継続し必要に応じて時に活用しつつ、大多数の者は近隣の町村の建設現場やインフォーマル・セクターで就労したり、農業賃労働者となったりして現金収入を得て暮らすようになった。水田を新たに造成したり、常畑農耕を試みたり、ふもとの町のカステリホスの市場で売るためにバナナやイモや果物などを自家用でなく商品作物として栽培するようになった。人類が狩猟採集から農耕を

経て、産業革命以降の近代化を経験してきた数百年を、アエタ被災者は、一〇年か二〇年の短い期間で濃縮して経験したのである。

それと同時に、噴火以前には識字教育を十分に受ける機会のなかった子どもたちが、ほぼ全員、再定住地の小学校に入学し、なかには高校や大学教育を受ける者たちも多く出てきた。最近では彼らのなかから中東への海外出稼ぎに出る者たちも出ている。一方、大人たちは、再定住地内の旧集落の地区ごとにまとまって、住民登録をして援助物資を受け、地方選挙や国政選挙に参加することで、フィリピン人としての自覚を強めていった。政府の造成した再定住地は、それぞれ一〇〇〇人単位のアエタ有権者がおり、選挙に立候補した政治家にとっては無視できない大きな票田となった。

そうした政治家への陳情や、逆に政治家からのさまざまなきっかけを経験することで、フィリピン国民や市民としての正当な権利を持つこと、以前のように差別されて卑屈になる必要などないことを自覚していった。また、フィリピン社会の正当な一員であると同時に、記憶のない遠い昔（海面が今より一〇〇メートル近く低くフィリピンが大陸と陸続きだった頃）に、他のどの民族よりも早くフィリピン諸島にやってきた、祖先にちなる真正の先住民であるとの自覚も強めていった。<sup>※</sup>

その受益者は数が限られ、また担当するNGOやNPOによって、支援の内容や質、プロジェクト資金の額や物資の量に大きな差異があった。近隣で活動するNGOとNPOの間で、必ずしも情報の共有や不足する物資の融通などが円滑に行われたわけでもなかった。

それは日本のAVNやIKGSの場合でも同様であった。同時期に、近くで活動する他のNGOやNPOとの協力関係は、AVNと国境なき医師団との連携を除けば、ほとんどなかった。しかし、そうした制約をもちつつも、逆に狭い範囲を対象として深く関与することをおして、支援する者とされる者たちとの間に相互の理解と信頼が生まれ、関係が長く続いていった。国境なき医師団が半年ほどの非常時、緊急事態を乗り切ると、モニタリング・チームを残して引き上げたことと対照的である。日本のNGOの場合、災害救援や復興支援で介入すると、被災者たちが災害前から抱えていた貧困や差別、その他の構造的な問題にまで関心が広がり、それゆえその問題に対処するために、災害復旧の後も長く、最低でも三、四年は支援を続けることが多かった。一〇年、二〇年と続く団体もある。<sup>※</sup>

そうした長期にわたる関係をおして、現場で活動するNGOやNPOを支援する日本側の会員と、支援されるフィリピン側の（元）被災者が、海を越えて互いに直接に結ばれ合っているという自覚を強く持つようになった。

そうした自覚は、とりわけアエタの復興を支援する内外のNGOが、災害救援の具体的な活動の進展のなかで、半年後くらいから力を入れたエンパワーメントのセミナーその他の活動によるところが大きかった。被災直後の支援は、まず、一時避難所の確保と整備、食料と飲料の供給、傷病者の治療に始まり、すぐに続いた雨期の間には伝染病（インフルエンザや麻疹の蔓延と死者の続出）の流行阻止が緊急課題となった。噴火から半年ほどが過ぎ、乾期に入ると伝染病の流行も収束すると、内外のNGOの支援の内容は、再定住地における生活再建のプロジェクトとともに、エンパワーメントのセミナー開催、およびアエタ組織の結成と相互連携の推進などとなった。<sup>※</sup>

私自身が深くかわり、また自ら積極的にプロジェクトの推進に協力していったピナトゥボとイフガオにおける日本の小さなNGO（AVN）やNPO（IKGS）の活動を振り返ると、政府や国際機関などとは異なった役割と貢献をしていたことが分かる。政府や国際機関は、災害直後の緊急救援の際には、被災地の全域を対象として衣食住の確保や医療活動を中心に行った。災害直後の救命を最優先するプロジェクトの後には、道路や橋、その他の土木インフラ修復に主眼が置かれた。それに対して、ピナトゥボの場合には一〇〇を超えた内外のNGOやNPOが、それぞれの担当地区を割り振られて、そこでの活動に専心した。

実際に、それぞれの代表や主要メンバーが、互いに相手を訪問し合い、情報や意見を交換し、感謝を述べ、さらなる関与を約束し、そのことを帰国して仲間に報告することにより、互いが互いの飛び地であるような感覚で結ばれている意識が生じている。

旧カキリガン集落（ADA）の代表であるヴィクター・ヴィリヤと数人のリーダーは二度、ハバオ村（グロバール）の代表のナウヤックも数人の仲間とともに二度、彼らを支援するNPO（IKGS）の事務所があり支援者のいる兵庫県山南町に招かれて訪日している。そのことを契機として、ナウヤックは、一〇人ほどの木彫り職人とともに、新潟県の「大地の芸術祭——越後妻有アートトリエンナーレ」に二度招かれ（二〇〇九年第四回と二〇一二年第五回）、それぞれ一ヶ月にわたって滞在して、イフガオの伝統家屋を建て、チームボール彫刻を制作した。逆に山南町からは、IKGSの役員をはじめ、町の有力者がピナトゥボとイフガオにそれぞれ三回以上、さらには二〇人ほどの高校生が数度にわたり、ピナトゥボで五日ほどの植林ボランティア活動を行った。それに参加したメンバーの三人は、大学三年または四年生のときに一年間の休学をして、二〇〇四年から二〇〇五年までの一〇ヶ月間、ハバオ村でイフガオのカウンターパートの女性とともに合宿して、植林や社会開発のプロジェクトを行った（清水二〇

災害復興にしても社会開発にしても、国が実施するプロジェクトに比べれば、NGO・NPOが行うものは予算規模が格段に小さく、対象地域も狭く受益者の数も限られている。しかし逆に、そうした小さな規模の顔と顔が見える直接的な関係が結びつける信頼と理解の度合いは深く、長く続けることが可能である。そうした小さな試みが、日本の各地で無数に生じ、細い糸が束となって太い絆となつてゆくことが、グローバル化時代に海を越えた市民社会をつくつてゆくための一助となることを期待し、また信じている。ピナトゥボで、そしてイフガオで私が体験し、また目撃したのは、そうしたささやかではあるが確かな実例であつた。

## ●注

\*1 総人口を確定できないのは、噴火の前まで、山中に住むアエタたちは、外部との接触を嫌って自給自足に近い生活を営み、地元政府の日常的な行政の対象になつていなかったからである。とりわけサンバレス州側の南西麓ではカキリガン集落を除けば小学校もなく、保健衛生のサービスも受けず、国勢調査等も行われず、中央・地方政府の管轄外に置かれていた。近代世界システムの外部にあつた、と言ひ換えることもできる。

\*2 噴火時には、ピサヤ地方のパナイ島の天水水田地帯で経

済社会変化に関する調査を行つていた。マニラに戻ろうとしても、滑走路に二〇〜三〇センチほど降り積もつた灰砂のため、空港は一ヶ月近く閉鎖されてしまい、戻れなかつた。

\*3 日本の海外青年協力隊員の派遣要請をすることを強く勧め、そのための情報を提供したのは私であつた。それは、ピナトゥボのフィールドワークのためにお世話になつた、友人知人たちの生活向上のためにするような恩返しをしたいと願つたからであつた。

\*4 一方、江里子は、子育てのかたわら、平地民の噴火被災者のための再定住地であるカステリホス町マンガハン村にある自宅のすぐ近くに、二〇〇〇年に助産クリニック(C.P.P.: Clinic for Poverty「フィリピンの貧しい人のためのクリニック」)を開設した。毎月二五〜四五件のお産があり、二〇一四年末までの一四年間に取り上げた赤ちゃんは三〇〇〇人、診察した患者は一万人を超える。産婦や患者は町や市の医者にかかるお金がないような貧しい人たちであるため、診療費を請求せず、任意の謝礼を募金箱に入れてもらうだけである(ほとんどの場合は二〇ペソ〜五〇ペソ(四〇円〜一〇〇円))。支援会員となつている日本の多く個人のささやかな募金によつて活動が継続されてきたという意味で、小さな市民たちによる草の根の国際協力であり、未来へと続く希望である。詳しくは、富田(二〇一三)を参照。

\*5 左翼系のNGOの支援を受けた急進的なグループは、ピナトゥボ山の東側の麓に位置するクラーク米空軍基地が一九九二年に全面撤退したあと、そこを先祖伝来の土地と主張してアエタに返還することを求める運動を行つた。

\*6 私がボランティアとして活動したAVN(アジア・ボランティア・ネットワーク)は、医師を日本から派遣したが、それを受け入れたカウンターパートNGOの「国境なき医師団」は、麻疹の流行予防を阻止するために大量の予防接種を迅速に行い、その流行がほぼ終息すると、半年後の一二月にはモニター・チームだけを残り、本隊は撤収した。それに対して、AVNは、医療救援から保健衛生や給食プログラム、生活再建と支援内容を変えながら、三〜四年のあいだ活動を継続した。

\*7 たとえば、兵庫県宝塚市の個人宅に事務所を置くピナツボ・アエタ教育里親プログラム(代表・松中みどり氏)は、現在に至るまでの二〇年余りにわたり、アエタの子どもたちが高校や大学に通うためにカステリホス町に寄宿舎を維持し、学費や生活費のための奨学金を支援してきた。奨学生の総数は一〇〇人を超える。

## ●参考文献

清水展(一九九〇)『出来事の民族誌——フィリピン・ネグリート社会の変化と持続』九州大学出版会。  
清水展(二〇〇三)『噴火のこたえ——ピナトゥボ・アエタの被災と新生をめぐる文化・開発・NGO』九州大学出版会。  
清水展(二〇〇七)『グローバル化時代に田舎が進める地域おこし——北部ルソン山村と丹波山南町をつなぐ草の根交流、植林、開発の取り組み』加藤剛編『国境を越えた村おこし——日本と東南アジアをつなぐ』NTT出版、一六五―一八九頁。

清水展(二〇一三)『自然災害と社会のリジリエンシー(柔軟対応力)——ピナトゥボ山大噴火の事例から「創造的復興」を考える』佐藤孝宏他編『生存基盤指数——人間開発指数を超えて』京都大学学術出版会、一六三―一九二頁。

清水展(二〇一三)『草の根グローバルゼーション——世界遺産 産棚田村の文化実践と生活戦略』京都大学出版会。  
富田江里子(二〇一三)『フィリピンの小さな産院から』石風社。  
阪神・淡路大震災記念協会(二〇〇五)『翔べフェニックス——創造的復興への群像』兵庫ジャーナル社。

牧紀男(二〇一一)『社会の流動性と防災——日本の経験と技術の世界に伝えるために』『地域研究』一一巻二号、七七一―九一頁。

山本博之(二〇一一)『災害対応の地域研究——被災地調査から防災スマトラ・モデルへ』『地域研究』一一巻二号、四九―六一頁。

Rosaldo, Renato (1980) *Hmong Headhunting, 1883-1974: A Study in Society and History*, Stanford University Press.  
Scott, James (2009) *The Art of not Being Governed: An Anarchist History of Upland Southeast Asia*, New Heaven: Yale University Press.  
Shimizu Hironu (1989) *Pinatubo Aytas: Continuity and Change*, Quezon City: Ateneo de Manila University Press.  
Shimizu Hironu (2001) *The Orphans of Pinatubo: Aytas Struggle for Existence*, Manila: Solidaridad Publishing House.

●著者紹介●

- ①氏名……清水展(しみず・ひろむ)。
- ②所属・職名……京都大学・東南アジア研究所。
- ③生年・出身地……一九五一年、神奈川県。
- ④専門分野・地域……文化人類学、フィリピン研究。
- ⑤学歴……東京大学教養学部卒業、同大学大学院社会科学研究所文化人類学専門課程退学、社会学博士。
- ⑥職歴……東京大学助手(教養学部教養学科と東洋文化研究所)、九州大学助教授(教養部)・教授(大学院比較社会文化研究院)、京都大学教授(東南アジア研究所)〔現在に至る〕。
- ⑦現地滞在経験……フィールドワークは、主にフィリピンと北ボルネオ(東マレーシア)、長期の滞在はボストン、北京、バンコクなど。
- ⑧研究方法……フィールド・ワーク、参与観察、インタビュー。すべて現場から考えるようにしています。地道で愚直に仕事を続けること、現地の人々と誠実に応答することをモットーに、十年で一冊の民族誌を目標にしています。
- ⑨所属学会……文化人類学会、アジア政経学会、東南アジア学会、Association of Asian Studies。
- ⑩研究上の画期……一九九一年六月一五日のフィリピン・ピナトゥボ山大噴火です。たまたま私は、その年の四月から一年間のサバティカル(研究休暇)でフィリピンに来ており、それ以降はもっぱらNGOボランティアとして活動しました。その活動をとおして、私自身の研究スタイルが「(たまたまの)成り行き↓(受身的な)巻き込まれ↓(積極的な)コミットメント」の人類学へと変わりました。
- ⑪推薦図書……Scott, James, 1985, Weapons of the Weak: Everyday Forms of Peasant Resistance, Yale University Press. 人類学のフィールドワークと政治学の分析を学際融合した傑作です。衝撃を受けました。